

『「場」ができるまで展 ～きく・みる・すごす～』レポート



『「場」ができるまで展 ～きく・みる・すごす～』

同展は12月21日(水)～26日(月)、大阪・本庄西の街に新たにオープンしたスペース「本庄西施工地区」で開催された複合イベント。

タイトルの通り「『場』ができるまで」をテーマに、ソノノチが近年取り

組んでいる屋外パフォーマンス作品〈ランドスケープ・シアター(風景演劇)〉の創作プロセスの展示をはじめ、ワークショップや音楽ライブ、トークイベントなど、さまざまな催しが開催された。

「本庄西施工地区」について

コムウト(工務店)とOSTR(設計事務所)が運営する、「建築施工」をテーマにした「場」。工務店と設計事務所が関わるヒト・モノのネットワークを生かし、「建築施工」の周辺に、新たなコミュニティやアイデアを生み出していくコンセプト。

1F



写真上: 1F展示の様子
写真下: ジオラマ。滞在制作の過程で関わったすべての人が一堂に会している。昨年度開催の「えんをめぐる」以降、制作が恒例となっている。(撮影: 脇田友)



メイン会場の一階では今年度ソノノチが上演した〈ランドスケープ・シアター〉作品「風景によせて2022 たびするつゆのふね」の創作プロセスの展示「風景によせて えんをめぐる」が行われた。

1Fのスペースは縦長の構造。入り口には挨拶文・場内マップが掲示され、足元のジオラマもかわいい。少し進んだエリアでは、中央の通路を挟むように様々な素材の板(本庄西施工地区との協同で一から作ったものだ)にかばんが掛けられている。これは「たびするつゆのふね」のクリエイションメンバーの私物で、中にはそれぞれのクリエイションに関係するものが入っている。観賞者はかばんを開け、ものを手に取ることで上演の様子を想像することができる。最奥のスペースは映像上演ブースとなっており、実際の上演映像をパノラマサイズで観ることができる。

ちなみに、この上演映像は「たびするつゆのふねプロセス便」に含まれているため、今でも購入して視聴することが可能(QRコード)。今からでも、「たびするつゆのふね」の世界を体験してみしてほしい。



2F

2階に上ると大きな写真が目に入る。「たびするつゆのふね」の上演場所となった風景の、抜けるような青空だ。そのとなりに同時開催された「風景を感じるワークショップ」の詳細が記されている。向かって反対側の壁には額装された上演の写真が整然と並べられている。

廊下を抜けるとサロンスペースがある。壁に沿って過去のアーカイブや手作りグッズ、広報物などが閲覧できる。中央にはテーブルが設置され、他の来場者やクリエイションメンバーと歓談したり、「読みもの集」と題された「たびするつゆのふね」のアーカイブ資料を手に取ることができる。イベント(次ページ)の際には観客の一時待機場所としても利用され、上演場所の名産でもある温かい掛川茶などが振る舞われた。



写真上: 「たびするつゆのふね」上演場所の風景、「風景を感じるワークショップ」の詳細。
写真下: サロンスペースの様子
(撮影: 脇田友)

パフォーマンス

作品「たびするつゆのふね」から生まれたのが『「場」ができるまで 展』だが、その『「場」ができるまで 展』から生まれたのがこのパフォーマンスである。演出はソノノチの中谷和代。

23日(金)19:00-と24日(土)14:00-の2度、展示があった1階の空間は完全に組み替えられ、つかの間の舞台空間になった。客席に向かって一直線上に並び替えられた壁にはさまざまなかたちのかばんが掛けられている。そこに登場する3人の人物は展示の来場者のようでもあり、作品を共につくるパフォーマーのようでもある。11 約30分の短い上演時間の中で、パフォーマーの身体から長いクリエイションの時間が凝縮されて伝わるようだ。



写真上・下: 上演の様子。
「たびするつゆのふね」の
クリエイションメンバーでも
ある藤原美保(ソノノチ)、
芦谷康介(サファリ・P)、
宇津木千穂が出演した。
(撮影: 脇田友)



音楽ライブ



写真: パフォーマンスの様子

イベント会期中、展示から受けたイメージで構想された2回の音楽ライブを開催。

23日には仲山涼太氏によるギター演奏が、同氏ゆかりの地であるスペイン・グラナダの風景とともに夜の会場を温めた。翌24日の日中には東瑛子氏(ヴァイオリン)と白石麻奈美氏(カホン)による、疾走感のある映像と音楽がシンクロしたパフォーマンスが行われた。

併設展『本庄西施工地区着工』

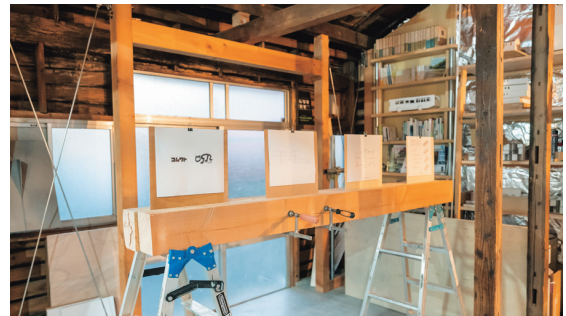


写真: 展示の様子 (撮影: 脇田友)

今回会場となった『本庄西施工地区』。その活動の一部を紹介する展示が、『「場」ができるまで展』の会場に隣接し、OSTRの事務所でもある「本庄西の現場」で、イベント期間中開場。会場の図面など、普段なら見られない舞台裏が見られる貴重な機会となった。

ワークショップ

パフォーミング・アーツと音楽という、展示自体の主催・共催である、「リベラルアーツへの挑戦」と「ソノノチ」の共同企画。「風景の中のリズム(時間)を見つける、原泉のサウンド・スケープをつくる」をテーマにひらかれたこのワークショップは、来場者が展示空間と能動的に関わり合うような催しとなった。

このワークショップではさまざまなワークが行われたが、風景に音を重ねるワークは特にユニークだ。展示奥の映像を

使い、そこに会場にあるさまざまなものを使って音を重ねていく。それぞれが思い思いの解釈で重ねられた音は、図らずもパフォーマンスのようになる。

ワークショップの紹介文にある通り、「身近な音を体感し、音に耳を澄ます時間。そして展示に関連したランドスケープ・シアターを多角的に味わうワークショップ」となった。

24日(土)11:00-12:30、および25日(日)11:00-12:30に実施。

写真: ワークショップの様子

